



# 高知医科大学

## 岡豊町小蓮にほぼ全ぼうを見せる

「医学の道」を志す学生が、県内はもとより全国各地から集まり、真新しい校舎に活気があふれています。  
五十八年度完成めざして、いま急ピッチで

工事が行われている岡豊町小蓮の「高知医科大学」周辺は、昔の面影はなく、一変して「医大のまち」となっています。

### 付属病院、今年10月開院 18科、320床で

岡豊町小蓮、国道三十二号と国分川の間が高くそびえる白い近代建築——高知医科大学（金木潔学長）は、県民の強い要望と無医大県解消の政策とが相まって、昭和五十一年十月に開学、はや五年目を迎えました。

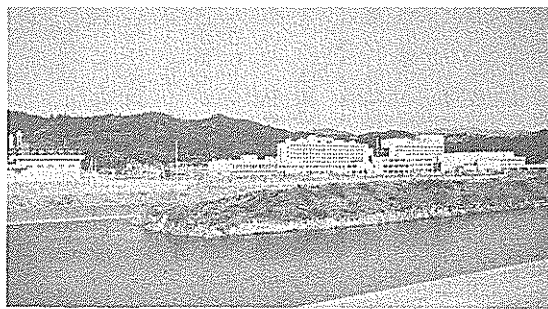
面積約二十一㊦の広大な土地に開学以来進められてきた建築工事は、全体の八十㊦が完成、講義棟、実習棟、基礎・臨床研究棟、本部管理棟、体育館などの施設が建ち並ぶ姿は、「壮観」です。

わずかに、講義棟と実習棟しかなかった昭和五十三年四月、待望の第一期生九十七名（うち女子十四名、県内出身者十九名）が入学して、静かな校舎に活気があふれ、人間の生命をあずかる医師の養成所としての第一歩をふみだしました。

その後、第二期生百六名（うち女子十六名、県内出身者四十六名）、第三期生百五名（うち女子十三名、県内出身者三十九名）が入学、この四月には、早くも第四期生を

迎え入れようとしています。

また、付属機関としての付属病院は、昨年末に病棟、診療棟が完成して、今年十月の開院（開院時二百二十床、完成時二百五十八年度六百床）をめざして、着々と準備が進められ、診療科も、内科、



外科などの他に麻酔科、歯科口腔外科など十八科が設けられ、医療体制は万全の設備が整うことになっています。  
教職員数は、最終的には約九百人が予定されるなど、その家族、

学生などを合わせると「大きな旧村」ぐらいの規模のものが生まれる勘定になります。

施設面では、残っている研究棟野球場、プールなどの着工が待たれますが、五十八年度にはすべての工事が完了することになっており、その総額は二百億円に達するほどです。

無医大県は解消されたものの、岡豊地区の環境は静かな田園地帯が一転、騒音こそないものの、市街化の傾向が強くなっていくことは確実です。

行政側の課題は、この周辺の市街化をどう整備していくのか——この検討は急を要しますし、新旧の人間関係など、地区住民の方にも新たな問題が生じることは十分考えられることです。

行政も市民も、住みやすい環境（精神的にも）づくり、新しいまちづくりの目標を定めて、お互いに努力しなければなりません。

白い校舎が、周囲の緑にはえるだけでなく、「地域としつかり結びついた医科大学」——これが地元はもとより市民の願いでもあります。

「たくましい田園産業都市」をめざす南園市に、さらに「学閥都市」としての要素がプラスされたわけで、高知医科大学が南園市の発展に果たす役割は大きなものがあると言えそうです。